

大和物語の成立

雨 海 博 洋

(一)

大和物語は、伊勢物語の如く主として一個人の歌を中心として、一私家集をもとに發展、形成され、一貫した物語と異なる。そこでは勅撰和歌集、多くの私家集、伊勢物語、萬葉集、はては口碑、傳説までその材料が擴大され、甚だ多種である。

さて「よからぬは忘れにけり」「え聞かず」「本になしとあり」「物語にて世にあることどもなり」「今は皆ふるごとになりたる事なり」「人の言ひけるまゝなり」と各段の尾に書いてあるものがあるが、これは全段數に比して多いものでないが、一つの編纂法の資料となり、明らかに眼に見、耳にふれたことを筆録した形跡を示すものである。この故に、大和物語は雜然とした配列をなしてゐるかの如き觀を與へ、又、雜然とし文藝的價值少しとの誹謗も受けて來た。

果して、大和物語は眼に見、耳にふれた、その都度、興味のまゝに何等の編纂意圖もなく誌されたものであらうか。大和物語の一七三段に渡る配列は雜然といふ語をそのまゝ受け入れ難きものがある、そこには伊勢物語の纏りの直線的なものと、その圈を異

にする連鎖的な纏りが、一段更に一段と絡み合つてゐる、孤立したものは弱々しく存在が眼につかぬのに反し、スクラムを組んだものは意外に強い力を發揮するものである。前後の關連のない斷片的な支離滅裂とした歌物語は、その情意をそぎ、讀者に強い感興を與へることが出来ない。幸ひにして大和物語は連鎖的な纏りの一つのもつてゐた。

A・B・C・D……と人物は變り、場所も時代も異なつても其處には變らぬ情意が底を流れて、色變り、品變り、大きさも變りながら鎖の輪は喰ひ合つてゐる。そしてA・B・C・D……といふ意を同じくするものが、一つのグループをなして、Xグループ、Yグループとなり、又もある一つの踏段によつてXYグループは連らなつて、全一七三段を展開してゐる。

(二)

先づ大和物語を開く時、伊勢物語と異なつて、登場人物には、大部分、判然とした名前がついてゐるのにきづく。伊勢物語は「昔男……」で押通すことが出来るが、大和物語はその多様な性質上、ある男をシンボルとして述べる事が出来ない。又、これは

古今和歌集と後撰和歌集との差の如く、前者の贈答の歌の何れかがその名を明らかにされず、後者には大抵、明記されてゐるといふ時代の傾向にもよるのである。

1、大和物語に表れる人名は、主として各段に連續的に記されてゐる。それは、

一段 亭子院の帝、伊勢御と歌を和すこと

二段 亭子院の法皇となり、山蹈の供の饗橋良利歌を詠むこと

三段 亭子院の御賀に闕して源清盛と俊子歌の贈答をすることの如く、一、二段は亭子院、三段は亭子院がこの物語の動機として存在してゐる。

一七段 故式部卿宮の出羽御と繼父少將、歌の贈答をすること

一八段 故式部卿宮、二條の後の御息所のもとに若菜につけて歌を贈ること

一九段 故式部卿宮と二條の後の御息所、歌の贈答をすること

二〇段 故式部宮に桂皇女歌を奉ること

に於て、一七段は式部卿宮の宮居をさし、次の段から敦磨親王のことに關して書かれてある。そのやうな形を基本として種々のものが集められてゐる。

これは一人の者を各面から立体的にみることの効果がある。

この方法は更に進展して、多くの場合、一つのグループから他のグループへと結合が行はれてゐる。

一四段 陽成院に本院の北の方の御妹、歌を奉る

一五段 陽成院に若狭の御、歌を奉る

一六段 陽成院の典侍御、繼父少將と歌の贈答をする

一七段 式部卿宮の出羽御、繼父少將と歌の贈答をする

一八段 故式部卿と二條の御息所

一九段 右同

二〇段 故式部卿と桂皇女

は一四段―一六段のグループと一七段―二〇段のグループが一六段と一七段との類似性に於て結合してゐる。一六段も一七段も繼父少將と歌の贈答をする。前者は春、後者は秋の歌をもつて對照的に連關してゐる。

三〇段―三四段は右京大夫宗子のことに関した物語であるが、三三段は躬恒院に歌を奉るで、これは三二段宗子に暗に加階を願ふとの内容上の類似の爲に、宗子のことをのべてゐる序に入れたものである。このやうな型は四八段―五二段にかけてもみられる。2、人の名をもつて繼承されるとともに地名をもつて繼承されるものがある。

九七段 太政大臣忠平、妻の死を歌ふ

九八段 太政大臣忠平、妻の母の死を歌ふ

九九段 太政大臣忠平、大井行幸に従ひ歌ふ

一〇〇段 李繩少將、大井行幸をうながす歌を詠む

一〇一段 李繩少將、病を得て死ぬ話

の如く九八段と九九段は大井といふ地名に關連して、この二つの段に連らなる二つのグループをもつないである。

(三)

(二) に於て、同一人物にまつはる種々の物語の集合は立体的

に、その人を見ることが出来ることを述べたが、次に各段が内容上如何に配列されてあるかをみるに（イ）前段と同じ意味合をもつて連結してあるもの、（ロ）前段の意味合を繼承しながら發展してあるもの、（ハ）前段と對照させて連結してあるもの、の三種に分つ事が出来る。内容上の類似的繼承は情意を強調するに足り、發展は新たな興味と、對照は明確な印象を與へてくれる。そしてこの三つがグループ形成には殆ど基底となつて働いてゐる。

（イ） 同一人物の同意繼承

四二段

さとはいふ山にはさわぐ白雲の空にはかなき身とやなりなむ

四三段

まがきする飛彈の匠のたつき音のあなかしがましなぞや世の中

四四段

のがるとも誰かきざらむぬれ衣あめの下にし住まんなざりは

と夫々の歌の如く、惠秀法師の世への嫌惡が一つの段より二つの段と、次々に集つて、強い印象をあたへる。然し個々の人物の事柄に關した段でも、内容上の繼承をしてゐる。例へば四段―十段までには、人間苦の種々相の展示がみられ、戀、死別、生別、逆境の悲痛を類似的に集めた。五三段―五五段は別離に關して、九三段―九四段は夫々戀愛、結婚の成就せむとした時、妨げが突發して破られるといふ劇的な場面に關連し、六三段―六四段は男女の中が利害關係の立場から妨げられるといふ筋合から關連繼承されてゐる。

（ロ） 繼承的發展、これは同じ意味内容を持つものを集めて、

そこに強い印象づけを行ふと同時に、内容の發展が一つの段から次の段へと行はれてあるのを見る。これは編者の單なる文學愛好の境を脱して創作家的態度をもつものと解さねばならぬ。例として一六段―一三〇段をみると、勅使として筑紫に下つた好古は檜垣御を訪れる。女は昔の面影のなく、香も消え失せたのを恥ぢる。（一二六段）然し大貳の館に行き歌を詠む（一二七段）そこに居合せた人々は女の歌の上手なのに驚き連歌を試みさせる（一二八段）男は任が終つたのか、再會を約して歸京したが、その時になつても男が來ないのかこつ（一二九段）來ないのは秋風が吹きはじめたのかと、その情なさを歎く（一三〇段）といふ風に解釋出来る。このやうに發展的繼承は、一つのストーリーを持つて興味をつのらせる。これは同一人物ばかりでなく、個々人の配列に於ても内容上の發展的なものを見ることが出来る。

（ハ） 對照的繼承は大和物語に於て特に注目すべき方法である。

一、二の例をあげてみると七六、七七段は男が女を、七八、七九段は女が男を戀慕する。又、一四一段の多情な女に對照させて、一四二段には純潔な女の例をもつて來てゐる。

以上は部分的な關連をみて來たが……實際にはこの部分的なものが、又、絡みあつてゐる。かくして大和物語は連續的發展をしてゐる。

一二四段 時平の北の方

と平仲歌の贈答

一二五段 時平の家にて

時平に關連して

忠岑歌を詠む

一 二六段 檜垣御を好古
訪ねる

一 二七段 檜垣御、大貳
館で歌を詠む

一 二八段 檜垣御、好事
者と連歌する

一 二九段 筑紫の女、京
の男に歌を贈る

一 三〇段 筑紫の女歌を
詠む

一 三一 段 醍醐帝に公忠
篤の鳴かぬを詠む

一 三二 段 醍醐帝と躬恒
月を詠む

一 三三 段 醍醐帝と公忠
外に出で、女の泣くを
見て慰む

一 三四 段 醍醐帝氣品あ
る意を召す

はその一例である。表の如く名義上からみれば、時平、檜垣御、筑紫の女、醍醐帝を受けて、その間に同内容、秋と春の對照、月の夜のおもしろきことども、氣品のある女の類型的な事に關連して、一三四段から一三四段までは一つの大きなグループをなして

檜垣御の歌の名手に關連して、

檜垣御より筑紫に關連して、

筑紫の女に關連して、

「秋風は」「春はたゞ」の對照、

帝と歌人

帝をうけ、更に前段の月の面白き夜の事柄について、

帝をうけ、更に氣品ある女に關連して、

ある。

勿論、グループを作る事が出来ず、前後の段と關連しない孤立した段も、まゝある。これは一つのグループを形成する關連性が盡き、新たに次の事柄に移る時、それが、その他種々の見聞を有してゐない場合には、ぼつんと尻切れになり孤立し、更に他の種々の興味深い話のグループの方に進んでゆくことある事が出来る。然し一方孤立した中にも、大きな立場からみると、其處にある意義がある。即ち、六二段の「のうさんの君と淨藏との戀」は、この前後のグループは悲戀に終つてゐるのにこの段だけ「限りなく契りて、思ふことをも言ひかはしけり」と互ひに厚い情愛の歌を交はしてゐる。これは編者が悲慘な事の連續はかへつて嫌惡と倦怠を來たすので、そこに一息入れさせた爲かともとれ、編纂意圖の一つとして考へられる。

(四)

以上一四六段までの事柄について考察して來たが、一四七段からは、物語の形態材料に於て、一四六段以前との相違があり、この段を分割線として前後篇に分つ事が出来る。藤岡博士は一四四段に滋春に關する説話があり、辭世の歌も記され、伊勢物語の結末と類似してゐるので、此の段をもつて、その境目ではあるまいかと考へられてゐる。然し私は、更に一四五段、一四六段まで延長して考へたい。その理由は兩段とも亭子院（宇多帝）と遊女白（玉淵女）とに關したもので、寛平より天曆の事柄をあつかつた前篇の部に入る資格があり、一四四段の滋春が「心あるものに

て「歌をよくした事に關連して、一四五段、一四六段は(三)の(イ)の前段と同じ意味合をもつて連結してゐるとみることが出来るからである。かくして一四七段を境目とする前後篇は、前篇の寛平―天曆の事柄が多く、和歌中心であるのに對し、後篇の傳説的で前者より古い年代のものが扱はれ、散文中心といふ差異がある。こゝに當然、作者は一人か二人かといふ問題が起る。古來種々論ぜられて來た事であるが、近くは西下經一氏が、原作者は唯一人と考へられるが、現存本を中心として考へると、作者は多数である。然し作品としての性質は原作者によつて決定されてゐると考へられ、現存本から原作を推定し、原作者を明かにする事は困難である、といふ意味の説をのべられてゐるのが妥當と思はれ、私も原作者を一人と推定してゐる。これは前後を通じて、その編纂意圖に差異がなく同方針のもとに進められてゐるからである。そして前篇は成長して後篇に發展したと考へられる。即ち一五〇段―一五三段は平城帝に關する種々のあはれな話、一四七―一四八段は津の國の地名にまつる物語、これ等は明らかに(二)の説明の部類である。伊勢物語から取入れられたと思はれる一五九―一六六段も(二)の部類に入り、しかも鹿尾菜、忘れ草、菊、飾棕等の物名に關連し、思ひをのべる歌を各段に取入れ、意識的に集めた事は、一六七段に雉、鴈、鴨を詠み込んだ歌の物語を類似として添加することになつてゐる。又、(三)に屬する例としては、一五四、一五五段は共に女を盜む話、一五七、一五八段は他の女に通ふが妻の心情にうたれ再び妻を愛することなどである。然し、和歌中心から散文中心の長文章に變化し

たのは、(一)(二)(三)に於てみた編纂意圖が發展成長し、小説化的傾向が行はれ、自然に口碑、傳説とかに材を求めて行つた結果と考へられる。それだけに後篇の各段は、多く前篇の數段分を含んでゐる。こゝに當然、原作者が單なる編者でなく、創作家的意欲の下に編纂を行つたことが知られる。

【註】

- (1) 段數は諸本によつて大分異なるものがある。こゝでは總べて水野駒雄氏の校註された前出家所藏本を底本とする改造文庫の段數による。
- (2) 藤岡作太郎博士著、國文學全史 平安朝篇 大和物語の項 西下經一氏著、日本文學史 第四卷平安時代前期、大和物語の項
- (3)

早稻田學報

——早稻田大学を軸とした

綜合文化誌——

(四月より復刊)

講讀料 一年間貳百圓

詳細は發行所まで

發行所

早稻田大学校友會

(電話(33)五八五九)
振替東京 八九八六

(毎月一回發行)
32頁—24頁